

教育・イン・ザ・ワールド

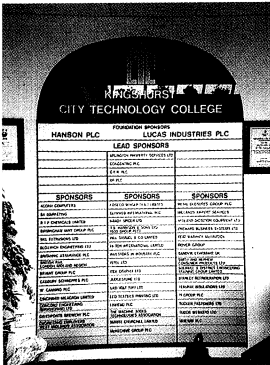
— 自立と尊厳に満ちた英国個人主義を見る —

国際化にふさわしい教育の話題をシリーズで紹介する「教育・イン・ザ・ワールド」。今回は、英語担当教員海外研修派遣で平成3年4月から1年間英国に滞在された渡部勢津子先生（県立湯本高校）による英国教育事情の紹介です。

滞在中、大学の紹介で4校を訪問する機会に恵まれ、その多様な学校運営に驚きました。しかし、4校には共通点も多く、教師独自の教科書選択、授業運営、指導方法や、少人数クラスでの個別指導中心の活発な学習活動など、創意工夫をこらした手作りの授業の中に、自立と尊厳に満ちた英国個人主義を垣間見たような気がしました。以下我が国では見られない特色ある2校について紹介します。

シティテクノロジーカレッジ (City Technology College Kingshurst)

ここは、保守党政府教育改革の流れの中で、1988年、企業がスポンサーになり、科学技術教育推進を目的に、市街部の11～18歳の年齢層を対象に創られた学校です。財源は政府資金と企業寄付金で賄い、学校経営はすべて校長に任せられ、その施設は他と比べて格段に立派で機能的に作られています。



▲シティテクノロジーカレッジのスポンサー企業一覧

このような恵まれた環境の中での授業風景は、生徒も教師も表情は明るく活気があり、一般科目のほか情報技術革新時代に対応したコンピュータの授業や日本語（選択）の授業もありました。授業が早朝に始まるせいか、10時頃に生徒と教師と一緒に食堂で朝食をとっている場に出くわしました。

ジョセフチェンバレンシックスフォームカレッジ (Joseph Chamberlain Sixth Form College)

ここでは、義務教育を卒業した16歳以上を対象に、大学入試準備コースやビジネスの実務コースなど多様なカリキュラムが組まれてます。構内には、生涯学習の一環として学んでいる成人の姿も見られます。授業は芸術に関する科目も充実しており、特にドラマ（演劇）の授業は自己表現力を養うため選択するものが多く、熱気と迫力を感じました。卒業生にはプロの劇団員もいるとのこと、さすが、シェイクスピアの国だと感じました。生徒は、90%がアジア、アフリカ、アラブ系



▲CTCの授業風景



▲ジョセフチェンバレン ドラマの授業で



▲ダンスの授業風景